

こどもと健康

NO・163 2016・1・15

インフルエンザの流行始まる！

今週になって急に冷え込みましたが、例年この時期から本格的なインフルエンザの流行が始まります。全国の感染症サーベイランスでは1月4～10日の第1週では一部休診の医療機関があったにも関わらず、1定点当たり、2.02と今シーズン初めて流行の始まりと言われる1.0を上回りました。都道府県別では沖縄県が8.19と最多で次いで秋田県7.85、新潟県5.73、北海道4.84、千葉県2.49と続き、大阪府でも1.58と流行期に入りました。

昨シーズンは例年より早く12月から流行が始まりましたが、今シーズンはここ10年で流行開始が最も遅く、一昨年の52週は大阪府で10321例、定点当たり33.6と早くも警報レベルの30を超えていたのに対し、昨年末の52週は0.62と50分の1となっています。昨シーズンの流行はA香港型が96.6%で、B型(山形系統)が2.6%検出され、6年前に大流行したいわゆる新型(最近では、AH1pdm09型と呼ぶ)は僅か0.8%でした。今シーズンになって全国の衛生研究所で検出されるウイルスはA香港型が41%と最多で次いでAH1pdm型30%、B型(山形系統)16%、B型(ビクトリア系統)12%となっていますが、検出数も少なく、今後の流行が注目されます。

暖冬の今年も先週末から平年並みの寒さとなり、3学期も始まりましたので、流行が拡大するでしょう。当院では12月28日に2家族4名から迅速検査でA型が検出され、1月5日にはB型が1名、16日にA型が3名検出されました。今シーズンになって堺市では1月14日になって深阪小学校が学級閉鎖第1号となり、今後増加すると思われます。

堺市ではまだ大きな流行ではありませんので、今ならインフルエンザワクチンの接種は間に合うかも知れません。13歳以上は1回接種、13歳未満は2週間間隔で2回接種をしましょう。65歳以上の堺市民は1000円の自己負担で1月31日まで接種できます。

今シーズン、WHOの勧告により日本でも3価ワクチンから4価ワクチン(A香港型、AH1pdm09型とB型ビクトリア系統、B型山形系統)に強化されました。欧米では今のワクチンより抗体誘導が優れた皮内ワクチンや高力価ワクチンがあり、経鼻生ワクチン(鼻腔に噴霧する)も使用されるようになり、近い将来日本でも使用できるようになるでしょう。

なお、治療は今のところ、タミフル耐性ウイルスは数%に過ぎず、10歳台は異常行動の観点から吸入のイナビルが、1歳以上はタミフルが主流になるでしょう。1歳未満にタミフルの適応がありませんので、重症の場合は静注射のラピアクタが使われます。

うがい、手洗い、マスクで感染のリスクを下げ、罹ってしまったら「咳エチケット」を心がけましょう。

B型肝炎ワクチン、10月から定期接種化！

予防接種上で定期接種化すべきワクチンにリストアップされているうちから、B型肝炎ワクチンが平成28年度から（おそらく10月頃）から定期接種化されることになりそうです。対象年齢は2か月から1歳未満の予定で、生後2か月、3か月、7か月の3回接種が推奨されています。

肝炎ウイルスは沢山ありますが、昔はA型ウイルスによる流行性肝炎が、50年ほど前から輸血などによるB型肝炎が、最近ではC型肝炎が問題となっています。日本人ではB型肝炎ウイルスを持っている健康保菌者、キャリアーは1～2%（以前は3%と言われていました）ありますが、無症状で、10年20年30年と経過すると慢性肝炎から肝硬変、肝臓へと進展します。母親がB型肝炎ウイルス陽性の場合、生後すぐからHBIGと肝炎ワクチンで母子感染を防ぐ事業が30年前から実施されてきましたので、キャリアーになるケースが激減しました。しかし、B型肝炎ウイルスは血液中だけではなく、唾液、痰、汗、涙、精液にも含まれていることが判明しており、保育園や高校の運動部部室で拡大したケースも報告されています。ウイルス感染を幼少時に受けることでキャリアーになりやすいと言われており、WHO加盟193カ国のうち183カ国でワクチンは接種されています。

日本でも平成28年度から定期接種化される予定ですが、10月実施となると思われます。対象は2か月から1歳未満になると思われますので、該当しない子は任意接種を受けるようにしましょう。初回接種後1か月後と5か月後の3回接種です。詳細が判明次第、お知らせします。平成27年11月に生まれた子は3回目を10月に接種するスケジュールを組むと3回目は定期接種として公費で接種できます。又、平成27年12月に生まれた子は10月に第1回、11月に第2回を接種すれば、2回分が公費で接種可能です。スケジュールについてはご相談ください。

ワクチンによる副反応は他の不活化ワクチンと同じく、注射部位の発赤、腫脹の他、発熱が僅かにある程度です。対象年齢以外の方も将来の肝臓の予防ワクチンと考えて、任意接種を受けましょう。

RSウイルス感染症、流行中！

昨年秋からRSウイルス感染症が保育所を中心に流行しています。潜伏期は4～5日で鼻水、鼻づまり、咳があり、発熱を伴います。乳幼児特に、6ヶ月未満の乳児が罹ると、更に喘鳴（ヒューヒュー、ゼーゼー）を伴った咳をして高熱も出て呼吸数も増し、息苦しくなることがあります。ウイルスを含んだ鼻汁や分泌物が気管支に流れこむ為、気管支炎から細気管支炎が起こるのです。次第に哺乳できなくなり、新生児では無呼吸になることもあります。乳児は急速に気管支炎、細気管支炎から気管支肺炎となることがあるので、注意が必要です。ありふれたウイルスですので、1歳までに半分、2歳までに殆どの子が一度は感染を受けますが、初感染の時に最も症状が強く出ると言われます。何度でも罹患しますが、年長児になると次第に症状は軽くなり、鼻カゼ程度で終わる子もいます。お母さんからの免疫移行がない為、お母さんの鼻カゼから新生児が罹患して重症化することがあります。インフルエンザと同じく飛沫感染をしますが、経口感染もあって赤ちゃんはなんでも口に入れますので、注意が必要です。感染の予防にはうがい、手洗いとアルコールによる消毒です。風邪をひいたら、咳エチケットを守り、特に赤ちゃんが口に入れるおもちゃやドアノブ等を消毒しましょう。